

江田郁夫・築瀬大輔編

## 『北関東の戦国時代』

高志書院 二〇一三・三刊

A5 二七〇頁 六〇〇〇円

平成二十三年八月から翌年三月にかけて、群馬県立歴史博物館・茨城県立歴史館・栃木県立博物館の三館が連携して、北関東の戦国を共通テーマとした展覧会とシンポジウムを開催した。本書はその成果報告になる。

第一部は群馬でのシンポジウムをもとに、享徳の乱以後の十五世紀後半の関東の状況を対象としている。

第一章山田邦明「十五世紀後半の関東」は、当該期の関東の内乱について、その前提となる前史、享徳の乱、長尾景春の乱、両上杉氏による長享の乱を概略している。

第二章森田真一「享徳の乱期の五十子陣について」は、享徳の乱で上杉方の本拠となった五十子の政治的機能と役割を論じている。

第三章内山俊身「戦国期東国の首都性について」は、公方足利氏が鎌倉から拠点を移した古河が、京都に対する「東都」であり、その経済的中心性や地政学的特徴により選択されたものであったとしている。

第二部は茨城でのシンポジウムをもとに、十六世紀前半の北関東を扱っている。

第一章佐々木倫朗「十六世紀前半の北関東の戦乱と佐竹氏」は、佐竹氏を中心に、北関東地域の戦乱と領主権力の形成過程を見ている。

第二章江田郁夫「戦国大名那須氏の成立」は、十六世紀に那須家を統一することになる、下那須家の成立を検討している。

第三章築瀬大輔「戦国期渡良瀬川の洪水と水運」は、両毛地域をつなぐ渡良瀬川流域における水害と水運に注目して論じている。

そして第三部は栃木のシンポジウムをもとに、十六世紀後半、特に天正年間を注視した論考で構成されている。

第一章市村高男「惣無事」と豊臣秀吉の宇都宮仕置」は、近年議論の多い「惣無事」の検討を通じて、豊臣政権の関東政策と、小田原の陣後の豊臣体制について述べている。

第二章荒川善夫「古文書で見る常陸小河合戦」は、「小川岱状」に記された常陸小河合戦の実態を、古文書により検証している。

第三章柴裕之「織田権力と北関東地域」は、織田権力の関東仕置とその後の政情が、豊臣権力による「関東惣無事」政策へつながることを見通している。

第四章戸谷穂高「沼尻合戦」は、天正十二年（一五八四）沼尻合戦で対峙する北条氏と北関東領主連合の、領域構造の論理的差異を浮き彫りにし、それが「惣無事」政策に影響を与えたことを指摘している。

本書が扱う北関東地域は、近年研究が進んでいるが、基本的な文書の年代比定をはじめ、権力構造や領主間の外交、隣接地域との関連性といった検討すべき問題がなおあり、またはじめにで築

瀬大輔氏が言及する、関東各地の地域概念と区分についても、今後さらに研究を深化させる必要がある。本書はこれらの課題を解明する上で、多くの示唆と問題提起を与えており、今後の北関東地域だけでなく、東国研究を進める上でも基本となる書である。

(木下 聡)